

反 dhvani 論

— Dhvanyāloka I, 1 —

波 多 江 輝 子

Ānanda(vardhana) の *Dh(vanyāloka)* において、dhv(ani) は、k(āvyā) の本質 (ātman) として、その地位を確立したが、サンスクリット詩論 (Alaṅkāra) には、この dhv に対して、その重要性を認める立場 = dhv 論とそれを認めない立場 = 反 dhv 論とがある。この両者の対立は、サンスクリット詩論における一つの重要な問題点であるように思われる。また、それは *Dhv* の時代からあるいはそれ以前から存在していたことが、*Dhv* I, 1 によってわかる。すなわち——

「詩文 (k) の本質は暗示 (dhv) と名づけられる、と賢者たちによって前に説かれたが、(I) 他の人々は暗示は存在しないと言った。また、(II) 他の人々は、それは第二次的なもの (bhakti) に含まれるものであると言う。また、(III) 或る人々は、その真実性は言葉の領域外に存すると言った。そこで、通人 (sahṛdaya) の心を喜ばせるために、暗示の本性を、以下に述べる。」

Ānanda (波線部) によれば、dhv は彼以前に、賢者たち (*Dhv* の *vṛtti* によれば、k の真実性を知る人々) によって創始された用語であり、すでに批評家の間で知られていたものである。また、反 dhv 論としても、(I) Abhāvavāda (否定論): dhv は存在しないとする説、(II) Bhāktavāda (Bhākta 論): dhv は bhakti に含まれるとする説、(III) Anirvacanīyavāda (定義不可能論): dhv は言葉の領域外に存する、つまり、定義することができないとする説 (下線部) が挙げられている。これらを、*Dhv* の *vṛtti* と Abhinava(gupta) の注釈 *L(ocana)* に従って、以下に述べる。

(I) Abhāvavāda……この説は、Ānanda によって、次の三種に分けられる。

(1) 単純否定論: 「k とは ś(abda) (語) と ar(tha) (意味) のみを śarīra (本体) とするものである。語に所属する美しさ (cārutva) の因としては Anuprāsa (押韻) 等 = ś(abda)-al(aṅkāra) がよく知られている。また、意味に所属する美しさの因としては Upamā (直喩) 等 = ar(tha)-al(aṅkāra) がよく知られている。また、字音の集合 (varṇasamghaṭanā) の性質 (g(uṇa)) = ś-g と ar-g として、mādhurya (甘美さ) 等も知られている。Upanāgarikā 等の三種の v(ṛtti) (語法; アクセント・

イントネーション・ピッチ等)は、或る者たち=Udbhaṭa 等によって説かれている。また、Vaidarbhī 等の三種の r(iti) (文体)は、或る者たち=Vāmana 等によって説かれている。al・g とは別個であり、かつ、美しさの因である、この dhv と呼ばれるものは、何であろうか? [そのようなものはないのである。] (KSS 版 pp. 16-20) 「k における美しさ (cārutva, śobhā) の因は al・g にほかならない。他のもの、たとえば、v・r は、各々、Anuprāsa という al に、mādhurya 等の g に含まれる。従って、v・r も al・g とは別個ではない。」と L (pp. 17-21) は説明する。al・g より別個の美しさの因は決して存在しないから、更に新しく dhv と呼ばれるようなものを述べることはできないのである。

(2) 定義尊重論: 「dhv は正に存在しない。なぜならば、よく知られている方法=ś・al・ar・al・ś・g・ar・g を逸脱した k の種類は、それ自体、k ではなくなるからである。《k とは、正に通人の心を喜ばせる語と意味から成るものである》というのが、k の定義である。そして、このような k の定義は、述べられた、すなわち、よく知られている方法すべて=al・g を逸脱したもの=dhv には当てはまらない。また、dhv の規則を認めている或る通人たちを予想して、彼ら自身の勝手な承認に基づいて、dhv に対して k という名称が与えられるとしても、すべての知者の心を抱えるものにはならない。[dhv がこのように定義されたとしても、成果はない。] (pp. 21-23) k の定義は dhv には当てはまらないから、dhv は存在しないのである。dhv を、今までの=Dhv までの Al に関する書物で述べられなかったもの、すなわち、al・g とは別個のものとするという勝手なことをしても、それは知者には通用しない。従って、dhv は正に本質的に存在しないのである。

(3) Al・G 論: 「新しい dhv と呼ばれるものは、正にありえない。なぜならば、dhv は、魅了性を越えたものではなくて、美しさの因として、今までにすでに述べられたもの=al・g に含まれるから。あるいは、美しさの諸々の因のうちのいずれか一つに対して、別の新しい名称を与えるとしても、al・g とは別個のものであることはないから、それは意味のないことである。」 (pp. 24-25) k の美しさをもたらすものは、語と意味との al と g とに含まれるから、dhv は存在しないのである。それは、せいぜい、美しさにつけられた新しい名前にすぎないのである。

以上の三種の Abhāvarāda には、あまり明確な相違はないように思われる。Abhinava も L (p. 26) において「すべての否定論者 ((Abhāvavādin) たちの結論は、皆共通している。なぜならば、① dhv が美しさ (śobhā) の因である場合には、g・al とは別個でないから、また、② dhv が g・al とは別個である場合には、

美しさの因ではないから、また、③ 美しさの因があるとしても、注意に値するものではないから。」と述べている。Ānanda は、更に “yasminnasti.....” (pp. 26-27) という dhv 否定論者の śloka を引用する。Ānanda はその作者に “anya” (他者) と言及している。それは、Abhinava によれば、「テキストの作者 (grant-hakṛt) と同時代の Manoratha という名前の詩人」(pp. 26-27) である。「テキスト」を Dhv であると考え、それは Ānanda の年長の同時代人の Manoratha ということになる。“Manoratha” という実在の人物が否定論者として挙げられることから、この説は、単なる Ānanda の想像したものではないと思われる。

(II) Bhāktavāda..... 「dhv と呼ばれる k の本質は、二次的な働き (guṇavṛtti) = bhakti である。」(p. 28) Abhinava (pp. 28-31) によれば、bhakti は lakṣaṇā (間接表現) であり、guṇavṛtti である。そして、それに基づいて生じるもの = bhākta は、lakṣaṇika であり、gauṇa であり、amukhya である。「k を定義する者たち (L (p. 32) によれば、Bhāmaha・Udbhaṭa・Vāmana) は、guṇavṛtti を、あるいは、他の何らかの種類 = g·al の種類を、dhv という語によって表現していないが、k における二次的な働き (amukhyavṛtti) による用法を説くことによって、dhv への道をわずかに切り開いている。しかし、dhv の定義はしなかった。」(pp. 31-32) この説は、Ānanda が “yadyapi ca.....parikalpyaivamuktam——‘bhāktamāhustamanye’ iti” (pp. 31-32) と述べるように、想像上のものである。

(III) Anirvacanīyavāda..... 「定義する自信のない者たちは、dhv の真実性は、言葉の領域外にあるものであり、通人の心にのみ感受されるものである、と述べている。」(pp. 33-34) この論者は、dhv を否定するわけではなく、dhv と呼ばれるに値するものの存在を認める。しかし、dhv は叙述あるいは分析の領域を越えているから、dhv の美しさを享受するかもしれないが、dhv を述べなかった。彼は、dhv を知ってはいたが、それを定義することができなかったか、あるいは、定義する意志がなかったかである。

以上が、Dhv において示された三種の反 dhv 論——五つの説——である。これらの反 dhv 論の論者がそれぞれ誰であるかは、Dhv および L の記述からは、特定することはできないように思われる。Ānanda 以前の Alaṅkārika、たとえば、Bhāmaha・Udbhaṭa・Vāmana・Daṇḍin が dhv 理論を知っていたかどうか、dhv に対して如何なる見解を持っていたかについては、彼らの著作——そこには、“dhv” という語は見出されないが——すべてを詳細に研究した後にしか、何も述べることはできないように思われる。

(九州大学大学院)